

# 序に代えて

井上 治

本別冊は、井上が研究代表を務めた「北・中央ユーラシアにおける異文化の波及と相互接触による文化変容の歴史的研究」(平成16～19年科学研究費補助金 基盤研究(B)1課題番号:16320081)のメンバーから寄せられた十編の論考をまとめた論文集であり、本研究課題の研究成果報告書とは別のものである。

本研究課題は、北方ならびに中央ユーラシア地域の複雑で多様な文化を、当該地域の各種言語に通じたメンバーが、歴史学・言語学・文学・人類学などの手法を有機的に組み合わせ、時代・地域・学問分野・方法論などの研究上の境界を超えて考究することを目指した。基本視点に設定したのは、異文化受容と文化変容の過程という時間軸と歴史である。具体的に目指したのは、文献資料・口頭伝承などの資料の分析を通じて、在来要素と外来要素の存在、外来要素の波及・流入過程、外来要素の流入による在来要素の変容と定着過程、在来要素の干渉による外来要素の変容と定着過程、それらの中間に存在する諸媒体などに着目して、受容・変容・定着という文化の動態を把握すること、各地域における異文化受容と文化変容のモデル化の可能性を追求すること、上記の動態あるいはモデルの相互比較により地域間の異同とそれを生んだ歴史的・社会的諸要因を究明すること、各地域における「伝統」の再構築とアイデンティティやエスニシティのダイナミズムの実態を明らかにすることとし、これらのいずれかの側面に、メンバーがおのおのの興味と視点をもってアプローチした。

以下、ここに寄せられた各論文について、編者の立場からその内容を簡単に紹介しておこう。いずれも、異文化接触を通じて生み出されたものやそこに見える異文化的要素の現われ方、異民族統治下における被統治者側の反応、ヒトの移動や時代の変化にともなう文化変容などを題材として扱っている。

栗林均「多言語分類辞典『御製五体清文鑑』の利用に関する覚書」は、18世紀末に清朝で編纂された、満洲語、チベット語、モンゴル語、ウイグル語、漢語の5言語対訳辞典『御製五体清文鑑』を研究するにあたっての問題点や考慮すべき点を、これまでの栗林自身による研究成果、異版や各種「清文鑑」(清朝時代に編纂された満洲語辞典の総称)との対照、先行諸業績に対する精密な批判的分析を踏まえ、落・乱丁、表記のズレ、採録語彙に見える差異、採録されたモンゴル語の満洲文字による独特の表記を事例にして明示する。

宇野伸浩「フレグ家の通婚関係にみられる交換婚」は、イランに成立したモンゴル人政

権イルカン国のフレグ家が結んだ婚姻関係を分析し、フレグ家も、モンゴル帝国の他の王家が名門姻族との間に結んだ婚姻関係に典型的に見えるギブ・アンド・テイクのパターンに沿った交換婚が行われていたことを明らかにし、イルカン位継承においても後継者候補の母方の血筋が意識され、名門姻族から妻をめぐって姻戚関係を作ることによって名門姻族とのつながりを作ろうとしたと論じている。

柳澤明「遼寧省鳳城・岫巖のバルガ人」は、オノン・シルカ河流域からフルンボイル一帯に居住していたバルガ人の鳳城と岫巖への南方移住の過程や当地の民族構成の複雑化、定着後から現在に至るまでの過程と現状を、文献史料と現地調査によって追跡した結果、現在や近い過去における当地のバルガ人たちには元来の生活文化や社会習俗の形跡をほとんど認められなかったこと、その社会・文化変容に満洲化と漢化というプロセスを仮定できること、系譜の整理や歴史の掘り起こしを通じてバルガ人のグループ・アイデンティティが維持・再確認されていることなどを明らかにした。

藤代節「北東アジアのチュルク諸語研究」は、北東アジアとくに旧ソ連圏のチュルク諸語の使用現況をロシア語と対比して示すとともに、ソ連崩壊以後の研究環境の開放が外国人研究者のアクセスを可能にしたと意義づける。これを踏まえて、シベリアのヤクート語コミュニティの成立過程と現況、ドルガン語の形成過程と現況に事例を求め、情報化の進展下、シベリアでのヤクート語の言語的優勢が失われつつある反面、言語の保持と継承への動きがあることを指摘し、最後に、鉄のカーテン消滅後の現地の研究者や日本の若手研究者の活動への期待を表明している。

諏訪淳一郎「ポスト社会主義トゥバにおける自然の物神化とエスノ文化資本の生成」は、ポスト社会主義時代の到来とともに急速な都市化を受けたトゥバの文化的産物が市場における新しい交換の対象となり、国内外に相互交通するようになった過程で、それまでには不可能であったようなイメージの資源となり、トゥバの文化的産物そのものと、それらを産出している文化実践の変容の過程を、喉歌(ホーメイ)をめぐる文化現象を事例に、「自然の物象化」および「エスノ文化資本」と諏訪が名付けた文化装置による作用であると論じる。

坂井弘紀「中央ユーラシア・チュルクの叙事詩に描かれる「異民族」」は、中央ユーラシアのチュルク系叙事詩に敵方として登場する「異民族」としてキジルバシユ、カルマク、ロシア、中国に着目し、その描かれ方やこれらと戦う主人公の意識について具体例にもとづいて考察し、「異民族」と対峙する主人公側の意識がムスリム、国家や政権、部族集団、現代的な意味での「民族」とも相通じる意識など多様であることや、「異民族」を絶対悪として描くような勧善懲悪という単純な構図をもつとは限らないものではないことを指摘する。

森平雅彦「事元期高麗における在来王朝体制の保全問題」は、元に藩属した時期の高麗独自の王朝体制保全の枠組みに関する定説に対する評価、在来の王朝体制を保障する意思

決定形式の再検討、王位と所領をめぐる状況にみる王朝存立の様相の把握、官制・礼制・刑獄などにみる旧習保全の様相の概観を踏まえ、元における高麗在来王朝体制の保全とは、相手国に対し一定の実質的影響力を保ちつつ、比較的高度な自律性と独自性を認めるモンゴルの征服地支配の一般的方式が、冊封・賜印・頒曆など一部の形式において中国風の外皮をまもって表れたものと結論する。

石川巖「古代チベットにおける古代ボン教とその変容」は、儀礼や術法を用いて靈的存在と交渉して現世と死後の双方における幸福を目指した古代ボン教は、儀式効果の保証のため他宗教の伝承を摂取し、儀式や術法で交渉する対象を他宗教の神格に置き換えてもそれらの実践に支障がないという点でも他宗教の要素が入り込みやすかったことから、道教的要素を吸収したのち、仏教に同化する過程を経て変質し、仏教やボン教や民間信仰に溶け込んで消滅したが、それらの諸宗教の構成要素として現在までその継続性は広く認められると述べる。

藤井麻湖「英雄叙事詩『ジャンガル』における七冲の痕跡」は、英雄叙事詩『ジャンガル』において、主人公ジャンガルが7歳のときに、幼馴染であるホンゴルと一緒にアルタン・チェージを服属させたことで、その権力が確立することに着目し、この“7歳”が、七冲という、十二支におけるある支とその支から数えて七番目に該当する支の組み合わせを言う易学概念につながる歳ではないかという仮説を提起する。

井上治「19～20世紀前半のオルドスにおける外来文化要素の受容過程に関する一考察」は、1836年に著されたモンゴル・オルドス地方の祖先（偉人）崇拝儀礼に新たな仏教的要素が持ち込まれた過程を示す新出史料の文献学的考察を踏まえ、一連の過程を、すでにモンゴルに定着した仏教文化の新要素の受容・変容プロセスととらえ、そこに、オルドスにおける伝統的価値観と仏教的価値観の整合過程が存在したと推定し、その過程のモデル化を試みるとともに、在来の祭祀儀礼システムに新たな要素を持ち込んだ出来事が1836年後のオルドスにおける歴史書成立の原因であったと論じる。

最後に、研究代表である井上の稚拙なマネジメントのため、各メンバーの研究の成果をとりまとめて、北・中央ユーラシアにおける異文化接触と文化変容の歴史過程を体系化する作業にまでたどり着けなかったことをお詫びするとともに、本研究課題で設定した主たる意図・目的をくみ取って研究をおこなってくださったメンバー各位に深甚の謝意を表したい。

2008年3月

